

保育専攻学生が乳児とのかかわり場面で 体験する困難さ

柏まり (初等教育学科), 葉山美織 (西宮市立わかば園), 山田美穂 (教育心理学科)

Studies on the difficulties of childcare major to experienced by childcare students in relation scene with infants

Mari KASHIWA (Department of Elementary Education)

Miori HAYAMA (Nishinomiya city of WAKABAEN)

Miho YAMADA (Department of Educational Psychology)

抄録

本研究は、保育士資格取得を目指す保育専攻学生が、乳児とのかかわり場面で体験する困難さについて、学生の意識調査を基に明らかにする試みである。本研究を通して、保育専攻学生が困難を感じる要因について把握し、保育士養成課程における乳児保育の指導内容の充実と、保育専攻学生のニーズに寄り添った具体的な支援につなげていきたい。

キーワード：保育専攻学生、乳児とのかかわり場面、困難さ

1. 問題の所在

保育専攻学生において保育所保育実習は、保育士としての職務内容を実践的に知る上で重要な学びの機会と言える。保育専攻学生は保育士資格において基盤となる専門科目の履修を経て、保育所保育実習に臨む。保育所保育実習を終えた多くの保育専攻学生は、失敗を乗り越え、成功体験を得ることで保育士として目標を明確にしている。

しかし、保育所保育実習において十分な満足感や達成感を得ることができず、保育士として働く事への不安を抱く学生もいる。保育所保育実習終了後の保育専攻学生の報告の中には、「子どもが何を言っているのかわからない」「子どもの気持ちをわかってあげられず、つらい」といった乳児(注1)とのかかわり場面において困難性を感じている様子がうかがえる。

乳児を保育するために必要とされる非言語的コミュニケーション能力は、生身の相手との実体験を重ねることを通して修得される部分が多い。乳児は言語発達が未成熟なため、言葉にならない思いや感情を、限られた言語・表情・態度・行為などの方法で伝えようと